

# おっぺけぺ節について

田 口 親

「おっぺけぺ節」については、西沢爽著『日本近代歌謡史』上（桜楓社刊・平成二年十一月二十日、初版）第二十九章（頁一八三九～一九一〇、さらに下巻頁二〇五〇～五一にもおっぺけぺ節が掲載されている）に詳しく書かれている。そこで私は、歌詞の収集を主にしているので、この本の中から歌詞の部分をまずそのままお借りして書かせていただくことにしよう。

まず「中村座大当書生演劇オッペケペー（日本橋長者町福田板―明治二十四年七月、大郎坊小國―（五代國政か）―元は変体仮名か）」（後掲図版参照）を解説し活字にされたものをそのまま載せて見よう。但し、丸ガツコ（）は西沢氏

註、角カツコ「」は田口註である。また、波線~~~~を付した語については、後に若干の解説を付しておいた。

- ① 〈權利幸福きらひな人に、自由湯をば飲みたい、オッペケペ、オッペケペッポー、ペッポーポー、堅い上下、角とれて、マントル、ツボンに人力車、意気な束髪、ポ（ポ）ネット、貴女に伸（紳）士のいでたちで、外部の飾はよいけれど、政治の思想が欠乏だ、天地の真理が解らない、心に自由の種を蒔け、オッペケペ、オッペケペッポーポー、
- ② 〈米価騰貴の今日に、（不景氣極る今日にというのもある）細民困窮省らず、目深に被ふた（かぶった）、高帽子 金の指輪に金時計、権門貴顕に膝を曲げ、藝者にたいこ（幫間）

に金を蒔き、内には米を倉に積み、同胞兄弟見殺か、幾等慈悲なき欲心も、余り非道な薄情な、但し冥土の御土産か、地獄でゑんまに面会し、いろいろ遣ふて極楽へ、行けるかへ、ゆけないよ、オッペケペ、オッペケペッポーペッポーポー、

③ へ(人の噂をする又陰で悪口言はれる裏表——と、はじまるともいう)

亭主の職業は知らないが、おつむは当世の束髪で、ことばは開化の(傍線部分は田口挿入以下同じ)かんごで(にて——と)も)みそかのことわりカメ(洋犬)だいて、不似合だ、およしなさい、なんにも知らずに知つた顔、むやみに西洋を鼻にかけ、日本酒なんぞはのまれない、ビールにブランデー、ベルモット、腹にはなれない洋食を、やたらに喰ふのもまけおしみ、ないしよでこうか(後架、便所)でへどついて、まじめな顔してコーヒー飲む、おかしいね、エラペケペッポーペッポーポー、

④ へ儘になるなら、自由の水で、国のけがれを落したい、オッペケペ、オッペケペッポーペッポーポー、むことり島田に当世髪、(束髪)、ねづみのかたきに違いない、かたまき(肩巻、明治二十二年頃から流行した一米〜二米幅ほどのカシ

ミヤや毛糸のもので、まわりにふき飾りのついたショール。

現在、東北北海道地方に残る角巻である)ゾロゾロ引きづらし、舶来もやうでりつぱだね、買ふと時ア大層おだしだらう、夏向アあつくていらないう、其時アおつかがすいりよ(推量)して、おそでにかくして一トはしり、からくり細工(質入)にいてくるよ、オヤ大きなこゑではいわれない、内証だよ、ぶたいはけつきやう(拮据か)だ、御免なさい、オッペケペオッペケペッポー、ペ(ペ)ッポーポー

⑤ へおめかけぜうさんごんさるに芝居を見せるは不開化だ、かんぜんでうあく分らない、いろけの所に目をとめて、だいちの夫をそでにする、浮気をする事必定だ、おためにならなら、およしなさい、国会開けたあかつきに、やくしやにのろけちやいられない、日本をだるじに守りなさい、まゆげのなののが(歌舞伎俳優)おすきなら、かつたい(癪)いろいろ(情人)に持なんせ、目玉をむくのが(意味、前出)おすきなら、たぬきとそいねをするがよる、オッペケペッポーペッポーポー、

⑥ へ親がひん(貧)すりや、どんすのふとん、敷て娘は玉のこし、オッペケペ、オッペケペッポー、ペッポーポー、娘の

かた掛けりつばだが、とつさんケット（毛布）を腰に巻き、ドチラモ御客をのせたがる、娘のころぶ（売春）を見ならつて、とつさんころんじやいけないよ（つづいて——かへり車はかけひきだ ほんとにかへしちやたまらない オヤあぶないよ——とも）、オッペケペ、オッペケペッポーペッポー、

⑦ へ洋語「またはかんご〈漢語〉というのもある」をならふて開化ぶり、パンくふばかりが改良でねへ、自由の権利をこうてう（拡張）し、国威をはるのが急務だよ、ちしきとちしきのくらべやゐ、キヨロくいたしちや居られなゐ、窮理（究理、物理学）と発明のさがけで、異国におとらずやつつけろ、神国名義だ日本ポー——。

次は「御葉はみがきオッペケペ」（水晶散なる粉齒磨）二十四年九月十二日の『日出国新聞』に見えるというものである。

⑧ ——御葉はみがきオッペケペ——（水晶散なる粉齒磨）「衛生進歩の今日に齒牙の大害省みず値段の安いにツイ惚れて、砂（房州砂）や烏賊甲の齒磨で、矢鱈に磨ゐて齒をへら

おっぺけペ節について

し、湯水のしみるハまだいいが、ゆるんでくるやら抜けるやらそれから胃病を引起し、珍膳佳肴も旨くなく、其所で目が覚め悔んでも、入れ齒ジャ齒ざしり出来ないよ、齒という文字ハよわひ（齡）とか、長命しようと、思ふならあれなる齒磨用ひなさい、是れハ今迄有触れた通常の品とハ大違ひ有効無害で御座ます本家ハ東京油町南新道三好堂兎も角一ト箱お試しに買つけペッポーペッポツポー

府下ハ勿論各府県下小間物店売薬店差出し置候間御最寄にて御求被下度候

発売本舗

東京日本橋区  
通油町南新町

三好堂

次に明治二十四年九月発行の「乗合本」、音曲師徳永里朝の「縁かいな節」と川上音二郎の「オッペケペー節」の二つが合わせて収録された唄本（表紙、里朝と音二郎画像五色刷、本文木版墨刷画入四六判二十丁へ和製洋紙、価五錢版元・東京京橋区五郎兵衛町九、井原松之助）の歌詞を挙げ

⑨ へうまく人氣を、鳥越の、書生芝居は中村座、民権自由を種として、仕くみは新作活歴で、座長の川上余興には、赤い

鉢巻、陣羽織、浮世風俗、穴さがし、おかしいネ、オッペケ  
ペッポー、ペッポッポー、

- ⑩ へ海山越えてはるばると、学文修業はよけれども、遊びを  
覚えて身の詰り、学資は固より衣類まで、手当次第に売払  
い、新聞売子となつてから、後悔したとて追ツかない、オッ  
ペケペッポー、ペッポッポー、

- ⑪ へ西洋見真似に、髻はやし、心はひらけぬ開化ぶり、英語  
か漢語かわからない、見ツともないから、およしなさい、オ  
ッペケペッポー、ペッポッポー、

- ⑫ へ束髪島田に、柳びん(乱れ髪)、じれつたむすび(洗髪  
のあとの無造作な櫛巻)は小意気だネー、ソレヨリ丸髻の品  
がよい、オッペケペッポー、ペッポッポー、

- ⑬ へ格子造りに御神燈、うはべは藝者の鑑札立派だが、半助  
(五十銭のことであるが、金額ではなく安売りの意味であ  
ろう)応来(藝妓・売春)お止なさい、仕舞にお鼻がなくな  
るよ、オッペケペ、オッペケペッポー、ペッポッポー、

- ⑭ へ頭は開化の束髪で、おなりは流行の洋服で、生読漢語を  
鼻にかけ、足の痛いも構ずに、靴を穿くのは負惜み、交際な  
んぞと名をつけて、無闇に男が手を握る、見ツともないか

ら、およしなさい、オッペケペッポー、ペッポッポー、

- ⑮ へ当時の世の中便利だネ、鉄道馬車は調法だネ、一区が二  
銭で、半区が一銭だ、途中で降るは御損だよ、皆さん危険  
よ、おのきなさい、オッペケペッポー、ペッポッポー、(ラ  
ッパの円太郎)

- ⑯ へ廃娼論じて髻ねじり、口には喋々唱へても、忍んでコソ  
く女郎買、其癖デレリで二本棒、なんだかネー、わからな  
い、オッペケペッポー、ペッポッポー、 (抄出)

- ⑰ へ文明開化で改良しても、兎角煩惱が邪魔をする、オッペ  
ケペ、オッペケペッポー、ペッポッポー、色の世界の事なれ  
ば、淫売稼ぎをするもあり、追々開ける温泉に、這入つた中  
の心よき、洗ふて拭ふて飛出して、内へ気がせく、早うやつ  
て、言ひつつ乗のが人力車、乗るなり持ちやげる梶棒に、お  
尻をふりふり一走り、急いで駆込む停車場、今いくソラ出る  
陸蒸気、ああ乗りはづれて気が悪ひ、おやおかしひね、髪  
(紙)をもむのが理髪床、借財(男の性器の部分)が高て入  
らねば、代言(代言人。弁護士の前身。明治二十六年、弁護  
士法施行)たのむが近道だ、見れば見るほど、いらいたい(い



じりたい——の上方語)、いらふとしとなる機械なら、西洋骨牌か花合、必ず金銭かけまいぞ、かければ官の御手数、終には監倉(監獄)で困ります、オッペケペ、オッペケペッポー、

⑱ へ道理はどうでもこの世をうまく、渡りごまかす才が一、

オッペケ、オッペケペッポー、ペッポッポー、いまの時節はわからない、学問ばかりぢやいけないよ、なんでもゴマカシ第一だ、晦日の払いにヤリクリの、算段一つできもせず、経済学士もあゝ浮世、法律学理は知らずとも、トンチではやる代言人、学問少しもないくせに、ゴマカス新聞記者の筆、三味線調子はあわずとも、座つき(藝妓のお座附藝。これをすませてから、お酌にまわる)が一つ弾けずとも、転がるのさえ上手なら、はやるはわけない易いこと、若くてメガネをかけたれば、学問知識があるらしく、鼻下に八字のヒゲあれば、どつかに分別ありそうに、見える浮世は不思議だね、口に靡娼よけれども、忍んでコツソリ女郎買、そのくせテレリで二本棒、オッペケペッポー、ペッポッポー、

⑲ へ今の世界は便利だね、鉄道馬車は重宝だね、一区で二銭だね、半区が一銭で、途中でおりるは御損だよ、オッペケペ

おっペケペ節について

ッポー、ペッポッポー、八人宛の乗合で、十六人の乗込みで、こんでもよければ立といで、オッペケペッポー、ペッポッポー、車がそれたに(脱線)下りとくれ、皆さん手をかしてかっいでおくんない、オッペケペッポー、ペッポッポー、白い旗なら待といで、赤い旗なら出るんだよ(乗合馬車の発着標識)おばさんあぶないよ、命がをしくば乗つといで、(馬車の暴走でしばしば怪我人が出たのである)オッペケペッポー、ペッポッポー、意気な年増の乗合で、めつぼうかい様子がいい、ぐんかんさけや(東京深川佐賀町の岩田商店が、明治十八、九年頃売出した「軍艦ビル」のことである)か、向島うへ半(植半、木母寺畔)か、八百松(墨田水神森)か、魚十(魚重、日本橋大丸新道)か、柏屋(両国)か、(いずれも料亭)世の中陽気だね、オッペケペッポー、ペッポッポー、ペッポッポー。

次に『日本近代歌謡史』の下巻に日清戦争当時のオッペケペー節がのっている。それをそのまま紹介すると(頁二〇五〇〜五一)

『オッペケペー節』

⑳

「北海の水にかゝやく朝日の御旗、非道荒能泣つ面、オツペケペー、当時の世界は競走だ、驚は羽のし豚ねらひ、にわとりはたからトツケイコー、この時蜻蛉(秋津洲)が飛び出して、負けぬ気性は親ゆづり、驚の皮肉に喰ひ入りて、鳥の王だと威張つても、蹴おとすいきほひすさまじく、朝日に匂ふ山ざくら、パツと香りし勇ましき、これも東洋の平和ゆゑ世界の奴等の眼をさませ、オツペケペー、オツペケペツポー。

㉑

「婦人なりとて御国の民だ、義務にvariはありはせぬ、オツペケペー、御国の大事を他所に見て、うか／＼暮しちやすまないヨ、矢鱈にお尻を撫でまわし、俳優に惚ける暇がありや、綿撒糸(綿をほ／＼したもの。ガーゼが出来る前は傷の手当に用いた)など拵へない、旦那に内証のへそくりが、あるなら献金するがよい、戦地はなか／＼お寒いよ、手袋なんども必要だ、御国の為だ献じない、お絹布ぐるみで暮しても、国民の義務を知らなけりや、皇国の名折だ氣をつけろオツペケペー、オツペケペツポー。

(明治四十年七月『新はやり歌』大阪、博多成象堂版)

『ちやん／＼痴氣オツペケぶし』

㉒

「汚れ腐りしアノちやん／＼を、日本で洗濯してやるぞ、オツペケペー、オツペケペツポー。

世界万国親睦の、条約整ひ居る中に、支那は野蠻で欲張りだ、其癖国も大かいし、小金も幾干か有様子、黙つて寝て居て喰てれば、何やら斯やら往るもの、処が教育がないゆゑに、泥坊根生増長し、隣国の朝鮮をせしめんと、臣下の内でもいけ太い、袁世凱をば子てより、飴屋(朝鮮飴と結びつけたもの。元來、朝鮮飴は求肥と練り合わせたものであるが、一般にはベツコウ飴を粗悪にしたブッカキ飴のこととも言つた。明治の民衆が馴染んだのは後者であらう。行商や夜の景物であつた)のお店へ入込せ、閔族(閔泳駿政權)なんぞと云ふやうな、番頭手代を抱込んで、兎角世間に事あれと、待は甘露の飴店の、処置が悪いと云ふ事で、東学党とか云ふ物が、採配取て蜂起して、政事の掃除をして遣ると、うち(内輪)の騒動が持上つた、オツペケペー、オツペケペツポー。

㉓

「底で飴屋は大変と、東学鎮に遣つたれど、中々容易に治まらぬ、味い／＼と袁世凱、私が鎮撫をして遣ると、支那兵大

勢呼び寄せた、心の内の計略を、大鳥公使は看破して、日本兵士を招き寄せ、館屋の爲めに談判を、開いて置いて天津の、条約反古になぜしたと、袁世凱を責付た、此一条にへコたれて、袁世凱はグウの音も、出す事出来ず逃去つた、弱いのねエ、馬鹿／＼しい、オヤバカベツポー、ベツポーポ。

一寸手出しをした其ために、溺れて死んだは是非がないオツベケベ、オツベケベツポー、ベツポーポ。

②<sup>4</sup> 及ばぬ事とは知らないか、豊島沖を夫となく、通りかかった我軍艦、豚めは無法にスポボンポン、撃つてはなした支那玉に、日本軍人立腹し、ドンと発した一弾に、高陞号（イギリス船、清国に雇われた輸送船）はお目出度、龍宮城へ追遣つた、操江号（清国の軍艦）の乗組は、驚き呆れて天手古舞、其内我軍乗つたで、濡手で泡の掴み取、濟遠広乙両艦は、彈丸傷沢山おみやげに、命から／＼逃帰る、途中で広乙一艦は、浅瀬に乘上げ其音で、火薬の庫が破裂して、船は素より豚尾も、海に居ながら焼死だ。大熱つ運尽漢、オツベケベ、オツベケベツポーベツポーポ。此一条から日清の、親睦破れて開戦の、勅語を各国へ発布あり、軍隊ドシ／＼派遣して、成親牙山をブツ崩し、分捕沢山大八車に、百七八十ゑんやらサ、

おっぺけぺ節について

運とこしよどつこいしよ、オツベケベ、オツベケベツポー、ベツポーポ（明治二十七年七月二十五日 豊島沖の海戦）

②<sup>5</sup> 分捕山程ある中に、可笑な品物二つあり、内証で何だと聞いたれば、一ツは官妓（宮中に仕える歌妓）の写真なり、是は兼々閔族が、葉志超（遣韓清軍都督）の好色を、知ツてて此度阿諛に、送つた物には相違ない、兎に角頗る別嬪と、云へば必ず戦争前、何時の頃にか京城へ、葉志超が往た折、写真ではない正真の、味を／＼に違ひない、然し夫等は我々が預り知るべき処ではない、最一ツ有たる品物は、葉志超なる宿の妻、お名は知らぬが滅法界、夫思ひの者と見え、何だ漢語で長たらしく、書いた文句を日本の、言葉に直して見たなれば、良人も随分気を附て、鉄砲玉の来る処は、雇た兵士を遣はされ、成文（歎—か）城か山蔭の、堅固の処にお身を置き、命を惜まぬ日本の、無法な兵士に見られぬ様、精々用心なされ被成た上、功名手柄は万人に、お越遊ばし英名を、三千世界に轟かし、分捕物は金銀か、糧食又は名刀類、売てもお金に成品の、外は捕ても入費損、お爲に成らな（マ）お廃なさい、夫から妾の氣に成は、一体良人は浮気性、戦争に勝たる祝ひだと、京城あたりの別嬪に、浮れ込では否（い）です、そんなお暇

が有たなら、鳥渡で宜から立歸り、お土産を持て懐しい、お顔を見せて頂戴よ、宜しいかへ、屹度だよ、斯云ふ様な馬鹿らしい、文が有たと思し召せ、然し諸君よ豚尾も、和睦になつたら朋友だ、破廉恥極まる支那なれど、アレでも一個の大將だ、余り恥をかかしても、日本の名譽にやならないよ、今の話は此場切り、世間へ吹聴サランバン、(ペケ、サランバンとも。ペケヘダメンサランバンへ捨てちまえ)語源不詳ヘマレー語の訛とも幕木のいわるヨコハマ語内証だよ、分つたかい、エラペケペツポ、ペツポポー。

(26)

〔日本海陸軍人の名譽〕——光輝く旭の御国旗オツペケペ、オツペケペツポポー、ペツポツポ。日本兵士は大勝利、一度京城へ凱戦し、分捕品々日の本へ、送り届けて兵者は、勝に乗じて踏出した、此時各国の公使達、コソ／＼話しをして曰く、日本と支那の戦争は、十に八九は支那勝と、思つて居たに驚いた、豊島成歎牙山での、日本軍略感服だ、然し今度は朝鮮で、第一等の要害地、此平壤は堅固にて、責るに利なく守るには、草刈童子で事足る、百般弁利の城と云ひ、殊に勇將左宝貴が、牡丹台とか名号たる、砲臺築て二万人、固く守護と聞くからに、如何に勇武の日軍も、獅子王ならばイザ

知らず、勝利は思ひも寄らぬ事、ハテ気の毒と肩に皺、よつてたかつて心配す、大島公使も此度の、戦争如何と寝食を、忘れて報知を待程に、此方は陸軍野津中將、進み進んで名にしあふ、大同江を打渡り、地理や守衛の豚尾が、動靜驚と窺つて、総勢すべて四手に分け、時しも九月十五日、城の四方を取巻て、呐喊を作つて責寄た、豚尾坊主も予てより、覚悟して居た事なれば、オット承知と得意面、銃口揃へて雨あられ、南京彈丸を發出た、日軍素より死場所を、茲と定めて戦ひし、鋒先するどく豚めらは、呆れてソク／＼逃じたく、然れど日軍すきまなく、切て廻るに途を失なひ、討れ死する豚尾は、茄子か南瓜を見る様だ、流石に頭太き左宝貴も、流れ鉄砲に傷を受、辛い面して居る内に、日軍追々乗込ば、是では命が危いと、常なら死んでも放ない、金銀韓錢さし出て、命許はお助と、六百余人と諸共に、泣々萎々夫へ出た、日軍心得片隅から、荒縄しごいてフン縛り、豚小屋造つて入て置き、日本白米喰したら、夢ではないかと喜んだ、夫も其管支那兵は、豚という名の付せいか、軍中すべての糧食は、南京米が三分の一、七分は豆腐の絞から、オツペケペ、オツペケペツポポー、ペツポツポポー。



②⑦ さしも堅固の平壤を、陥入れたる日軍の、名譽は高くそびへたる、韓土一の大孤山、其又た沖の大海で、豚尾痴氣始めた軍艦は、重ねく敗軍に、少しは恥たか今回は、何やら骨のある人が、居るかと思へたも無理はない、逃出す用意の端船を、李鴻章に取上られ、通る事が出来ないから、死物狂ひで働いた、夫で漸やくアンナもの、見られたさまかへ見つともない、一体全体支那人は、遁るが勝と云ふことを、ちゃんと覚へて居るぬゑに、鉄砲一ツ発すにも、ふんばる足と引く足の、工合が中々むづかしい、能くよく検査をして見ると、驚がどぜうを踐やうだ、都て出す足遁る足、万事弁利を考へて、足の太いは遁る時、どうも工合がよろしくない、足の小さいはそんな時、人に見られて見にくくない、夫から靴下靴の直も、幾干か安いと云ふ処から、足は小さいに限り升(女性性の纏足)、小さい分を上等の、人と見なすと此やうな、づるを構へた遁支度、そう云訳故たまらない、豚軍たよりにして居たる、水師提督丁汝昌、ハンネツケン(独乙の軍事顧問)迄日軍の、鋭き砲丸にしてやられ、船と諸共水底の、岩の狭間の新世帯、水や魚に不自由が、ないのみならず此後は、鉄砲玉が雨と降る、憂ひはないから御安心、是より陸路は鴨緑

おっぺヶぺ節について

江、ちよいとまたいで九連城、続いて乗取る奉天府、天長節の祝宴は、万里の長城で張るつもり、偕又廿八年の、雑煮は北京の城中で、目出度祝つて歸朝する、予定で進む海陸軍、進めや進め君の為、君の為なり国の為、日本万歳ボーイ表紙、五色刷。およそ四六判、活版、十二頁。明治二十七年十月、東京浅草茅町二丁目五番地、松成保太郎版である。(発売は江戸時代「武鑑」「江戸切絵図」の板元で知られた須原屋である)

次に『日本近代歌謡史』にないものをおぎなつて見ることにしよう。

新板 オツペヶペーふし(大販売・上州高崎田町壺丁目—  
亀舩屋卯兵衛・刊年次不明Ⅱ後掲図版参照)

②⑧ へくへの為めにもならない人は畑のか、しにおとります  
オツペヶペー オツペヶペッポ

へきかい志らける今日に。だれでもすましちやいられない。新聞ばかりをあてにして。なんにも知らずに志つたかほ。ぼふしはフランス山だかで。おめしハきつまの紺がすり。おびはちくぜんはかたおり。時計ハロンドン里うづまき。こうもり



やメリケンかいきばり。そのくせおかほは日本で。ことばハどこだかわからない。時／＼英語はつかツても。よく／＼きけばめちやくちやだ。おかしいね オッペケペー オッペケッポッポッポッポ

29) へみなりハ當世りつばだが。そのくせ心はきたないよ。うわべばかりじやわからない。心のそこから洗ひ上げ。国家のためにつくすなら。やまとだましひふりおこし。ぎいんのしりをしするがよひ。海防費でもおだしなさい オッペケペッポッポッポッ

(30) へ学もん事業のきらひな人にべんきようせんじてのませ  
たい オッペケペ オッペケペッポペッポッポー

たなのぼた餅いつ落る口をあいてもむだな事。是も時節と  
べんきようだ。ぬれてであわもちあぶないよ。やりそこなつ  
たら大へんだ。すぐさまくるのがしつたつり公賣しよぶん  
ハあたりまへ。金をかりるにやむづかしい。しちをおくにも  
品ハなし。おまけにおはへた職ハない。くるまを引くにもな  
まけもの。しまいにやしぬのをまつばかり。にほんのはじだ  
よみツともない。およしなさい。べんきようするのがだい一  
だ オッペケペー オッペケペッポベッポッポ

③① へだんなさんハ女ずき。おかみさんハひるねずき。おめか  
けさんは芝居ずき。おじようさんが男ずき。うち中そろつて  
好だらけ。奥をみならふ見世のもの。ばんとうハ筆さきごま  
かして。むやみと出かける女郎かい。こぞうハ金銭ぬすみだ  
し。つかいさきにて買くらひ。すこしも知らないだんなさ  
ん。これでハしんしよがたまらない。そこらの處にきをつけ  
て。社会にじぎようをおこすならやッぱりべんきようが第  
一だ。オッペケペー　オッペケペッポベッポッポ

次は「川上新作　おツベけべー歌入雙六」横山園松（神田小川町一番地印刷兼発行者）明治廿四年　月　日印刷・出版（早稲田大学演劇博物館所蔵）というのを紹介しよう（後掲図版参照）。これには十二の歌詞があるが、その中、七つは前に挙げた①から⑦までの歌詞である。したがって未だ前に挙げられてないものをあげることにする。

③「大砲」陣ヶねぢんほら陣大鼓ゆみやなぎなたオツペケ  
 ぺー 昔のいくさハかつちうでブウくヂンくドン  
 くく今でハラツパでオツペケぺー

けんにピストル大ほうで洋ふく姿ハけいべんだこしに兵ろう

おつけなら三べんまわつてどんとなる十二時づとんでま  
まをくふオッポコポー

③③ 「英語」 国会ひらけた今日にうか／＼くらしちやおられ  
ない内国ざつきよハともかくも外国こうさい結ぶにハ洋語  
知らねばふつゲうだボーイもよこもじエラベンきやう親に  
わからぬ多いごにてくんかをうたふていかめしくまがあり  
やリードルほんどくしちやづけのおさいにするようだ小僧  
は追々りくつばりのきうへいぐわんことばかにしてとりあ  
はずぎろんでおやじをへこましてわからにやべんかいおこ  
いなさいぶんめいしんぼだオッペケペー

③④ 「ゆかい」 權さい手をひき合のりで出かけるおかたもゆ  
かいならみそこしきげてもまたゆかいおなじゆかい富には  
なるが四海兄弟いつとう非どう先すやうやめにしてますま  
すすすんでとつ国の自由けんり万国へががやしたら大ゆく  
わいオッペケペーオベッペケペッポーベッポー

③⑤ 「まち合」 束はつしまだ柳びんじれつたむすびはオッペ  
ケペーすきやに八丈しゆすのおびそこで今夜のおやくそく  
西洋料理かおんせんかずんととほくへ出かけるか一寸きん  
じよの街合でそこぬけさわぎやる時ハみそかのかんじよう

おっぺけべ節について

くにならぬあしたハ帳バでまじめがほオッパカバーオベケ  
ベッポーベッポー

③⑤ 「かがみ」 月にむらくも花にハあらし紳士に權さいみそ  
かになによ唱ふおまへハ七所がりて執達吏代言くろうハた  
へぬ公費しよぶんにさきしゆざい自由のけんりをうすくし  
て同ほう兄弟はぢかかすつとめて晴てはくじつの自由のか  
がみをみがくべしオッピカーオピケペーペポッポッポ  
ー

とある。あとの七歌詞は前に引用した通りで、即ち「人  
力車」は①と、「高ぼうし」は②と、「かめだいて」は③  
と、「當世かがみ」は④と、「芝居」は⑤と、「娘かたかけ」  
は⑥と、「日本図」は⑦と同じ歌詞である。

次は、白川宣力編著『川上音二郎・貞奴―新聞にみる  
人物像―』（雄松堂出版発行・一九八五年十一月十一日初  
版）の頁五四に明治二十四年の讀賣三月六日「書生芝居  
のオッペケ節」の記事の終り所

③⑦ 山椒小粒でも日本の國ハ、ひけハ取らない大和ぎもオッ  
ペケベッポー、ベッポーポー

③⑧ 儘になるなら自由の水で、国のけがれを落したいオッ

ペケペ、オッペケベッペッポ、ペッポーポ

とある。この本は、當時の新聞紙に依つて、川上音二郎・貞奴の記事をつぶさに収録したものである。大分長い間かかって三十八の歌詞を集めることが出来たので、この辺で一とまとめすることにした。そしてその基の歌詞は①から⑦の歌詞で、これは一応どの本にも出て来るものである。

オッペケペー節と言えば川上音二郎と言う位有名な人であるからその伝記は多くあるが、その妻貞奴も含めて一応簡単に紹介することにしよう。

川上音二郎は元治元（一八六四）年一月一日に筑前博多対馬小路三六番地に生れた。川上要蔵（もとは紺屋で明治になって改姓した）の二男である。家業は石炭卸販売を兼ねる船問屋である。祖父の紺屋弥作は藍染と砂糖問屋であった。貞奴は明治四（一八七二）年七月東京芝神明の質屋小山久次郎の末娘として生れた。音二郎とは七つちが

いである。明治十一（一八七八）年頃に音二郎は家出をして東京にやつて来て、芝増上寺の小僧・慶応義塾の塾僕（月謝免除で義塾で働き講義は聞ける制度）・裁判所の給仕など転々とする。

小山貞（貞奴）の方は実家没落して、東京葎町浜田屋亀吉の養女となっている。

音二郎は明治十四（一八八一）年には博多に帰り巡査となり京都に行き巡査をやめて、中島信行の機関新聞「立憲政党新聞」の名義人となった。そして壯士となって演説を始め幾度も投獄されている。自由童子川上音二郎の名前は段々と有名になっていった。しかし演説による明治政府攻撃は次第に取締りが厳しくなり続行が難しくなった。そこで音二郎は明治二十一（一八八八）年九月頃になると博多教楽社で滑稽演説会を開いて、浮世亭うきよてい○○の名で改良落語を口演している。一方貞奴の方は十六才になり明治十九（一八八六）年には葎町の半玉から奴の芸名で一本となっている。明治二十一年音二郎は落語をやっていたが仲々うまくゆかなかった。そこで考え出したの

がオッペケペー節ということになりこれが一世を風靡することになったのである。

すどうさだのり

角藤定憲という人が、音二郎より一步さきに「大日本壯士改良演劇界」の名で大阪西区越後町の新町座で改良劇を演じたが失敗に終わった。壯士芝居をやりたいと思っていた音二郎は書生仁和加というものをやったが失敗、堺の卯の日座の座主が落語とオッペケペーを買いに来たのに壯士芝居をやらせてもらえるように頼み込んで「日本改良演劇」の看板をかけたのであるが失敗、そうしてようやく東京で成功をおさめることになる。明治二十四（一八九二）年、浅草中村座で六月二十日から上演された「板垣君遭難実記」がそれである。これが切掛けとなって上流社会の人々が見に来るようになった。それには金子堅太郎という福岡出身の先輩の協力があつたのである。金子は伊藤博文の秘書官であるから政界財界の人々も見物に来る様になり、やがてこの人々の宴席に招かれそこで貞奴と出会うことになる。貞奴には岩崎桃介埼玉県出身、慶応の大学生でのに福沢諭吉の養子となった福沢

おっぺけぺ節について

桃介という恋人があつたが、これは桃介の洋行のため失恋となつてしまった。こんな時に貞奴の前に音二郎という男が現れたのである。二人の恋は実つて明治二十七（一八九四）年に結婚した。芸事の好きな二人であるから、音二郎は新劇の祖といわれ、貞奴は明治三十二（一八九六）年、大阪中座欧米巡業お別れ興業で貞奴の芸名で舞台に立ち女優第一号ということになったのである。世界を駆けめぐった二人であつたが、明治四十四（一九一）年音二郎は盲腸炎が原因で腹膜炎をおこし脳膜炎のため大阪帝国座付近の病院で危篤となり、帝国座に運ばれて舞台の上で息をひきとつた。十一月十一日午前五時、享年四十八歳であつた。戒名は「清流院釈秀音居士」、墓所は大阪承天寺で土葬である。貞奴はその後演劇活動が続けるが大正七（一九一八）年に引退、福沢桃介の支援で、名古屋に「川上絹布株式会社」を設立、昭和八（一九三三）年十月岐阜県各務原鵜沼に「貞照寺」を建立してその開基となつた。昭和十三（一九三八）年二月福沢桃介死去。昭和二十一（一九四六）年十二月七日肝臓がんのため、熱海



の別荘でその生涯を閉じた。享年七十六歳。戒名「貞照院孝順至道大姉」。貞照寺に葬られている。

それにしても明治時代という時代はものすごい時代であると思う。サンフランシスコを初めとして、ボストン・ワシントン・ニューヨーク・ロンドン・パリを駆けめぐり、帝国座を作り新派という一つの新しい劇団を作ってしまった音二郎・貞奴の行跡は只々驚くばかりである。

一応二人の紹介を終えたことにして、私の知り得た限りにおける二人に関する著作を書いておこう。

『川上音二郎』村松梢風著・太平洋出版発行、上（昭和27年2月25日）・下（同年3月25日） 小説風

『川上音二郎の生涯』井上精三著 葦書房有限会社発行  
一九八五年八月十日第一刷

『川上貞奴』丸川賀也子著 講談社発行 昭和五十三年九月八日第一刷（人物近代女性史―女の一生―②）

『実録川上貞奴』江崎惇著 新人物往来社刊 昭和六十三年三月一日初版第一刷

『川上座海を渡る』杉本苑子・河竹登志夫著 日本放送協会刊 昭和五十六年二月一日第一刷（NHK歴史への招待<sup>⑫</sup>）

『川上音二郎・貞奴』藤森栄一著者代表 学芸書林刊 昭和四十三年十月三十一日第一刷（ドキュメント日本人<sup>⑥</sup>―アウトロウ―）

『川上音二郎』松永伍一著 朝日新聞社発行 一九八八年二月二十日第一刷（朝日選書二四八）

『戯曲シナリオ川上音二郎・四幕』金子洋文 ゲラズリ  
『川上音二郎』明石銭也著・三杏書院刊 昭和十八年八月一八日

『川上音二郎』中川晋介著 牧野昇・竹内均監修 日本放送協会編・刊・組本社編集協力 平成四年十一月二十四日一刷発行（『日本の創造力』第八巻）

『川上音二郎』川上音二郎顕彰会編 昭和三十五年六月二十日以降十二回新聞切抜・没後五十年記念

『オッペケペからフォークまで』高田光夫著 宇野書房刊 昭和四十四年五月五日



『シナリオオッペケペ』御莊金吾著 文芸評論社刊 昭和三十三年十一月十一日

『オッペケペ』福田善之著「新劇」昭和三十九年一月号

『自伝音二郎・貞奴』川上音二郎 貞奴著 藤井宗哲編・

三一書房刊 一九八四年十一月三十日第一版第一刷

『川上音二郎・貞奴―新聞に見る人物像―』自川宣力編著 雄松堂出版刊 一九八五年十一月十一日初版

等々で、これは私が一応目にとめた物だけで、他にもまだまだ有ることであろう。

このオッペケペー節の中には明治時代の社会風俗に関する言葉が多く出て来るので、その説明をした方が歌詞の意味をよく知っていただけるのではなからうか。明治のことばについては多くの書籍が出版されているので、それらを見ていただければ良いのであるが、それも大変なことであろうという心持ちからあえて簡単に説明をさせていただくことにした。

権利 箕作麟祥が、漢訳の『萬国公法』にライト (Right)

とオブリゲーション (Obligation) と言う語を権利義務と訳しているのをそのまま引用した所から始まった語である。

自由 フリードム (Freedom) の訳で随意に思慮し決定する意味で自由民権等と共に明治時代には良く出て来る言葉である。

上・下 袴のことで、江戸時代の武家の式服で同じ地質、文様、色目からなる肩衣と袴のことである。

マンテル オランダ語の mantel からきた外来語で上衣・外套の意。マントと同じ。

ズボン フランス語の Jupon に由来する外来語。股引のような細袴。

人力車 和泉要助が発明したとされている乗物で、今でも色街とか観光地にのこっている。人を乗せる台に車がついていて人が引くものである。明治三年三月二十二日に公許されたことになっている。

束髪 明治十八年七月頃、東京経済雑誌記者である石川暎作と麴町区の衛生会幹事軍医の渡辺鼎との間に日本

の婦人の束髪の事について話がかわされ衛生上・経済上・交際上、現在の髪は究屈不便ではないかと言う所から、「日本束髪会」が設立され、終済雜誌社がその主体となった。『東京経済雜誌』は田口卯吉（鼎軒）の主催した経済雜誌社の雑誌で明治十二年一月の創刊である。その束髪会発案の場所は田口卯吉の建てた西洋館の中での祝賀会（明治十八年五月頃）で島田三郎の發議で、祝賀会に参会した人々に計られ決議した中に「束髪の奨励」と言ふのが入っているのである（青山なを著『明治女学校の研究』の中の木村熊二の話へ束髪の由来による）。その西洋館は現在も田口家に在る。束髪とは髪を束ねて結うことである。

ボンネット bonnet—フロント・ブリム (front brim) 前のふちのない冠りもので頭の頂丁から後にかけてかぶり前額はまるだし頤の下で結びとめるものである。帽子の基本形の一つである。

かめ 洋犬（ヨウケン）。外国人が犬をCome inとかCome hereと呼ぶのをカメと呼んでいるとの誤解から誕生し

た語である。目下の者にこのように呼んでいると言う記事もある。

けつきよう 桔据（キツキョ）。手と口と両方ともはたらかずさまをいう。

ごんさる 権妻は妾のこと。二号さんとも言う。日曜權妻、權妻二親等々という言い方もある。

かつたい かたい（乞丐・傍居）の変化した語で癩人のこと

じれったむすび 江戸末期から庶民の女の髪型。下層社會の女または洗髪後などに無造作な櫛巻き風の髪の結い方。

応来 オーライですぐにいうことをきいて男の自由になること、応来芸者のこと、英語のAll Rightから転じて出来たものか。

鉄道馬車 新橋から浅草の間の軌条を走っていた馬車、明治十五年頃から始まった。

デレリ しまりがなく、だらしないさまを表す語。

二本棒 武士の二本ざしをからかう語であり。子供など

が鼻水を二本たらしめているさまをいう。だらしくまぬけている様子。

陸蒸氣 オカジョウキ、陸蒸汽とも書く。汽車（鉄道車をいう）Railway cart 陸の蒸氣船の意。

借財<sup>かり</sup> カリは男の性器の部分、雁首（カリクビ）のこと、男陰の首のことと音が同じなので用いたもの。

座つき 芸者などが、客の座敷で三味線を引いてお祝儀の歌をうたうことでこの後にお酌に出るのである。

転がる 転ぶことで、私通する・売春すること。

乗合 乗合馬車のことで、軌道のない馬車で浅草・新橋・

品川の間を走っていた。「ガタ馬車」とも言われた。テト・テトテーと奇妙なラッパを吹きながら走っていた。その音を落語家橋屋円太郎がうまくまねしたところから「円太郎馬車」とも呼ばれた。

向島うへ半 隅田川木母寺<sup>もくもじ</sup>の境内にあった植木屋半右衛門の経営した料理屋、明治大正にはここを奥の植半、向島須崎町の見世を中の植半といっていた。

八百松 初め向島木田寺の傍に開業した。つづいて水神

おっぺけべ節について

の森に移り、明治三年枕橋際に新築して、二軒となった。魚十 明治初年向島にあった料理屋との説もある。

こうもり 蝙蝠傘のこと。

かいきばり 海気張・甲斐（かひ）絹張。骨組が甲斐絹で張ってあること。

シッたつり 執達吏のこと。強制執行や裁判文書の送達をする役人（執行人ともいう）。

陣ヶね ジンカネ。陣鐘・陣鉦のこと。陣中で軍勢の進退などの合図に打ち鳴らした鑼または半鐘という。

リードル リーダー・ブック Reader Bookのこと。英語読本。明治三十五年代を中心として「ナショナル・リーダー」が代表的であり、明治四十年代になると、神田及武の「カンダ・リーダー」が良くもてはやされた。

七所がり ナナトコカリ又はナナドコロガリと呼び、七所借のことで、あちらこちらから借り集めること。さきしゅざい 詐欺取財。旧刑法の罪名。人をだまし又は恐喝して財物もしくは証書類をかたり取ること。

オッペケペー節をながめていると明治時代の社会風俗をなんとなく感じ取ることが出来る。そしていつの時代でも権力者、金持のために世の中が動いているようであり、外国の文化というか、流行といったものによつて世の中は変化してゆくようである。そしてこのオッペケペー節のうたっている事は現代にも通用する所があるので、はなからうか。世の中は動き進歩しているようであるが、それは物質文明というか機械文明は進んでも人間そのものを變えるということは仲々むずかしいことであると思う。

明治時代の言葉の辞典は沢山あるが私の見たものを書いておくと、

『日本国語大辞典』日本大辞典刊行会編・小学館刊 二〇卷（昭和四十八年七月一日第一版第二刷—同五十三年七月三〇日第一版第四刷発行）

『明治のことば辞典』惣郷正明・飛田良文編・東京堂出版刊（昭和六一年二月一五日初版発行）

『江戸風俗語事典』三好一光編・青蛙房刊（昭和三十四年三月一〇日刊）

『江戸生業物価事典』三好一光編・青蛙房刊（昭和三十五年四月二〇日刊）

『明治東京風俗語事典』正岡容編著・有光書房刊（昭和三年十二月一日刊）

『明治語典』（桃源選書）植原路郎編著・桃源社刊（昭和四五年一月二〇日發行）

『明治世相編年辞典』朝倉治彦・稲村徹元編・東京堂出版刊（昭和四〇年六月二五日初版發行）

『明治事物起原』増補改訂版（別卷）石井研堂編著・日本評論社刊（昭和五十九年九月二十五日第一版第四刷發行）

『隠語辞典』榎垣実編著・東京堂刊（昭和三十一年一〇月一日第三刷發行）

（たぐち ちかし 元館員）







川上新作 おっぺけー歌入双六



川上新作 おっぺけー歌入双六

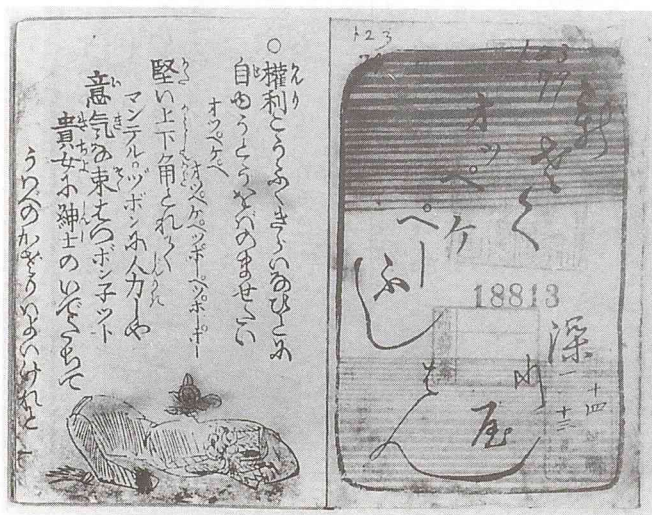
明治廿四年 月 日印刷 全年 月 日出版

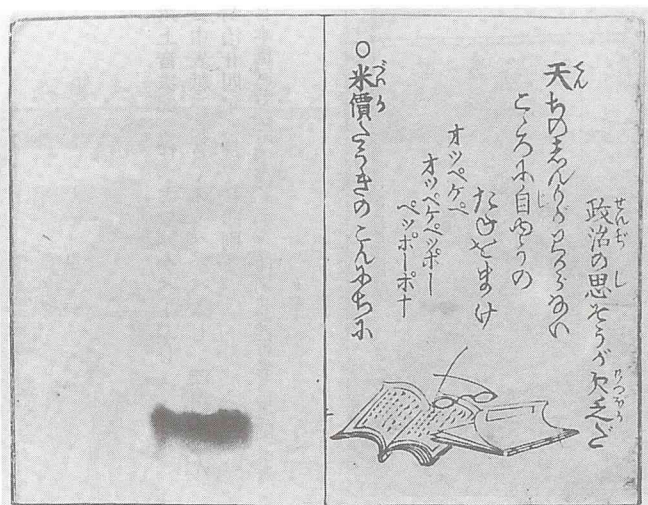
神田区小川町一番地印刷兼発行者 横山園松

おっぺヶぺ節について




川上音次郎新作 おっぺヶぺーぶし  
 (中表紙) 新さくオッぺヶぺぶし 深川屋はん  
 明治廿四年八月 日印刷  
 日本橋区若松町十〇〇〇 印刷兼発行者 尾関トヨ







ふかあいの  
不似合。あやう。あやいの  
あんふも知らばおまゐるか  
むやとお西洋や鼻あけ  
日本酒あんをのまれるの  
ビールおフランスビールモスト  
腹ふもあれの洋食をあたふのも  
まけぞ。あの一もでかちでこつて



まゆめ顔かほとコヒのむ。おじいねへ

オッペンヘイム

オオケツポーベツポーポー  
むことけ島田小當世髪  
ねづものかたみ遣いあひ

かゝるものゝく引つて  
船乗りやぞぞの心なむ  
買ふとはやへ層かゝなり  
夏向ふあつそゆゑのよ  
其時やあつそゆゑのよ  
おそふおかしき下なり。おかしき下なり。お  
かしき下なり。おかしき下なり。おかしき下なり。  
おかしき下なり。おかしき下なり。おかしき下なり。  
おかしき下なり。おかしき下なり。おかしき下なり。

オッペン  
オッペン

○おめりけ權妻ごんさい意いあらうあらうせんせんめ

芝居を見せるの不開化

かかせん

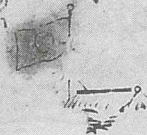
色々のにやうなやうな

5522 24th St. N.E. Wash. D.C.

あつめふふないあふあや



274





田口所蔵のもの  
新版オツペケペーぶし

明治廿五年二月 日印刷全月 日出版  
神田区松永町二十一番地 印刷兼発行者 山崎曉三郎版

新版 オツペケペーぶし



おつぺけぺ節について

権利はわがものひらめき  
自由湯やのむせいの  
オツペケペー オツペケペー  
ベツカーナ  
かみ上下かきおれ  
マンテルツボンおん  
まけわのねんたぐもの  
ボンナット 貴女お  
まけのねんたぐもの  
らりのねんたぐもの









明治五年二月 日印刷 全月 日出版  
 印刷兼發行者 袖田區松永町 山崎曉三郎版  
 二十卷 番地



年月なし

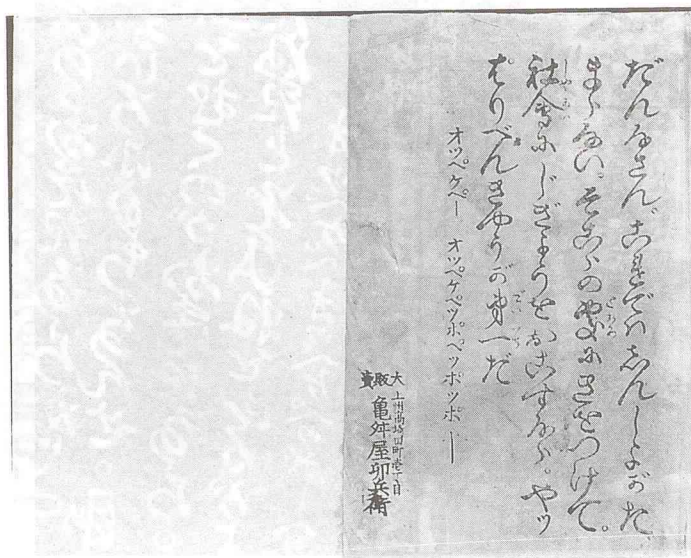


おっぺけぺ節について

[illegible]



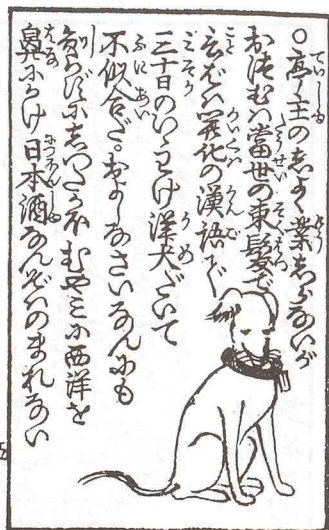
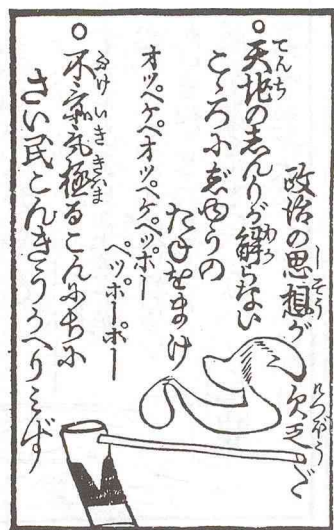
おっぺけべ節について

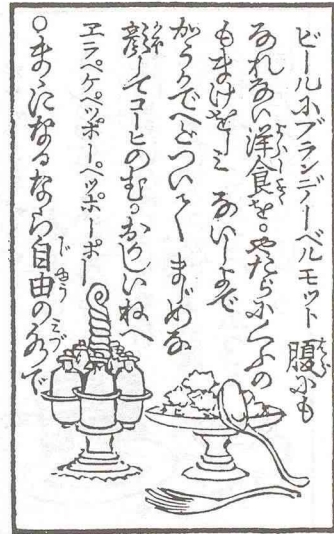




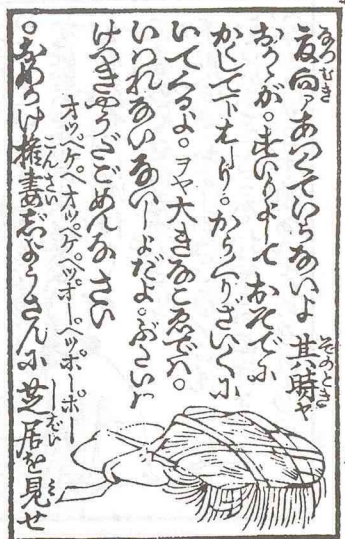




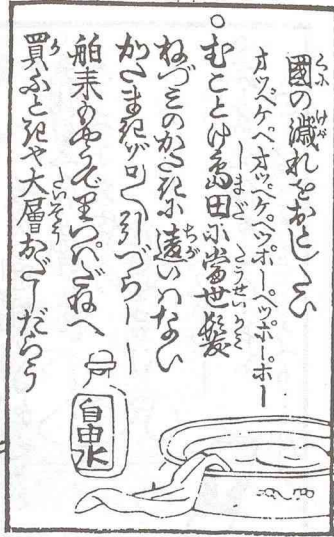




六



八



七



九



世界音楽全集 19 明治・大正・昭和流行歌曲集

堀内敬三・町田嘉章共編

春秋社發行（昭和六年四月十五日刊）

町田嘉章採譜

[明治二十年]

おつ ぺ け ぺ

本 函 子

〔町田嘉奈探譜〕

37

37

明治二十年 おつぺけぺ



おっぺけぺ節について



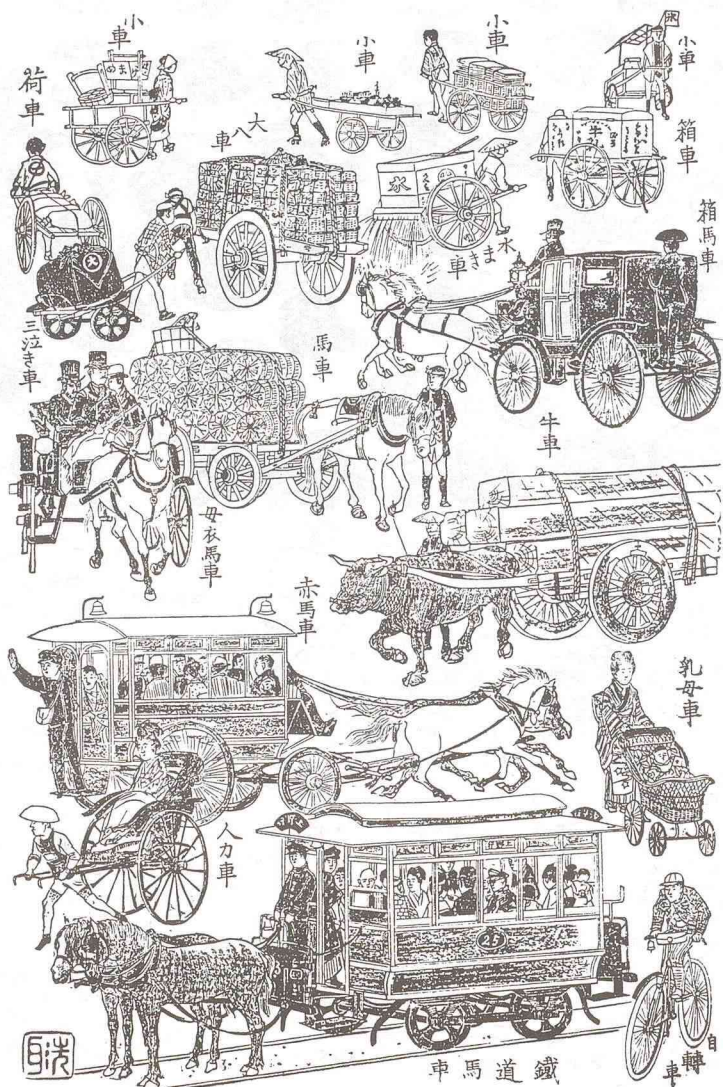
— 161 —



車力人と車馬の年初治明

「人力車」の変化に御注意

おつべけ節について







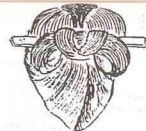


講座日本風俗史へ第十二巻 女性と結髪 (遠藤武著) 雄山閣刊 (昭和三十四年九月二十五日発行) より

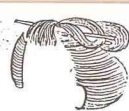
この図の原本は古今百風吾妻余波 (アズマノナゴリ) 編集人・東京士族岡本経朝・出版人・森戸錫太郎・発売人・万字屋錫太郎 (明治十八年十月) の解説本でオリンピック開催記念出版第一年度第四回配本で解説・編輯 吾妻卯女・発行人財団法人国際貿易観光協会発行 (昭和三十四年八月十日) のものである。特に「ち烈た結び」に御注意



仮髪下地



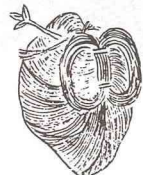
松葉返し



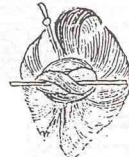
島田くつし



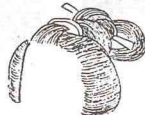
お煙草盆



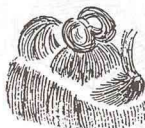
蝶々髷



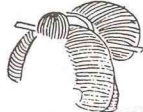
鶴



おばこ



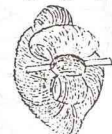
おとも



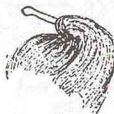
丸髷



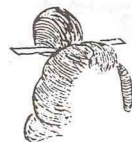
根下り銀杏



めおと髷



遠摩返し



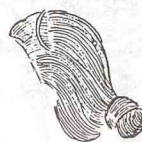
蔵前風



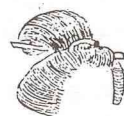
毛達摩



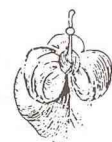
唐人髷



ち烈た結び



鍋町髷



天神髷



ふくら雀



馬の尾結び

最後は東京百事流行案内（編輯兼発行印刷者東京府平民大川新吉・専売者大川錠吉―明治二十六年十二月）

この絵で見られる様に風俗の和洋メチャクチャの時代である。娘の肩巻・老人の毛布・紳士・書生・人力車夫・ことにおわい（汚穢）やさんが靴をはいているのがおかしい。

